

平成 22 年 3 月 26 日
独立行政法人国民生活センター

スリングや抱っこひもなど赤ちゃん用子守帯に注意 - 窒息、転落、股関節脱臼の危険性も -

国民生活センターの危害情報システム^(注1)には、スリング、抱っこベルト、抱っこひも等（以下「子守帯^(注2)」という）使用時の赤ちゃんの危害・危険情報が寄せられており、過去 10 年間で 64 件に達している。子守帯での事故にはいくつかのパターンがあるが、2010 年 3 月 12 日に CPSC（米国消費者製品安全委員会）が、4 ヶ月未満の赤ちゃんにスリングを使う場合の窒息の危険性について警告情報を発信した。また同日、Health Canada（カナダ保健省）もスリング等を使用する際の転落や窒息事故に関し、注意喚起した。一方、スリングを使用した赤ちゃんの横抱きにより、股関節脱臼を起こす可能性があるとは指摘する医師の報告もある。

そこで、上述のレポートの紹介などと併せ、消費者に子守帯の使用にあたっての注意を喚起する。

- (注 1) 商品やサービス等により生命や身体に危害を受けたり（危害情報）、そのおそれがあった情報（危険情報）を、消費生活センター及び全国の危害情報収集協力病院（20 病院）からオンラインで収集・分析し、消費者被害の未然防止・拡大防止に役立てることを目的として作られたシステム。
(注 2) 財団法人製品安全協会「子守帯の認定基準及び基準確認方法」による。

1. 調査結果の概要（詳細は参考資料参照）

(1) 危害情報システムに寄せられた事故事例

国民生活センターの危害情報システムには 1999 年 4 月 1 日から 2010 年 3 月 15 日までに、「子守用被服品」での危害・危険情報として、消費生活センターから 29 件、協力病院から 35 件、合計 64 件の情報が寄せられている。

年度別件数では、2008 年度 13 件、2005 年度 9 件が目立っている。ケガをした赤ちゃんの年齢をみると、0 歳が全体の半数以上を占めており、0 歳 3 ヶ月から 0 歳 8 ヶ月に多くみられた。危害内容としては、「打撲傷・挫傷」が大半であった。主な事例は以下のとおりである。

[窒息の事例]

【事例 1】4 ヶ月の子どもを子守帯でおんぶしたら顔と背中が密着して窒息しそうになった。（受付：2008 年 10 月、受傷者：0 歳 性別不明 千葉県、消費生活センター）

[転落の事例]

【事例 2】抱っこ用の布を使用して子どもを抱っこしていたら子どもが転落し口の中を

切った。(事故発生年月：2008年10月、受傷者：1歳1ヶ月 女児、協力病院)

【事例3】抱っこひも(ハンモック状)を斜めがけして買い物中、前かがみした際に高さ1mより滑り落ちコンクリートの上に頭から転落した。(事故発生年月：2007年12月、受傷者：1歳0ヶ月 男児、協力病院)

[脱臼の事例]

【事例4】何年も前に、長方形の布で赤ちゃんを包む抱っこひもを使用していて子どもが足の付け根を脱臼した。(受付：2009年1月、受傷者：属性不明 東京都、消費生活センター)

(2) アメリカ及びカナダでの報告

[CPSCの警告]

過去20年間にスリングの使用による乳児死亡が14件報告されている。このうち4ヶ月未満の赤ちゃんが12件で2009年だけで3件報告されている。スリングには窒息事故をもたらすおそれがあり、未熟児、双子、虚弱体質や低体重の乳児には特に注意が必要である。強制的な規格が必要な幼児用耐久財のリストに、スリングを追加した。

[Health Canadaの注意喚起]

カナダでは、1995年以降ベビースリング使用時に9件の事故が発生しており、このうち2件は死亡事故のため、両親などに対して、ベビースリングなどを使用する際は次の点などについて注意するよう呼びかけている。

- ・保護者がつまずいて転んだときなどに赤ちゃんが転落する危険性
- ・不適切な姿勢のとき赤ちゃんが窒息する危険性

(3) 医師からの助言

国保松戸市立病院 リハビリテーション科・整形外科 品田良之 医師

赤ちゃんは気管が細いため、首を過度に前屈させたりすると容易に気道が閉塞してしまう。また、短時間で窒息を起こしやすい。赤ちゃんの顔色や身体の状態が常に観察できる子守帯の使用が望ましい。また、赤ちゃんは急にそっくり返ることがあるので、転落などにも注意が必要である。

赤ちゃんを横抱きの状態で長時間抱っこすると、股関節脱臼を起こす可能性がある。股関節脱臼を防ぐには、首がすわる3・4ヶ月時まで、できれば歩き出す前までは両足をそろえずに、股を開いた状態で抱っこする。

2. 消費者へのアドバイス

- ・赤ちゃんの体の向きなどに配慮しながら使用する。特に、顔が保護者の体に密着する、顎が胸につくほど首が強く曲がるなど、気道をふさぐ状態にならないよう注意する。赤ちゃんの顔色が見えるようにする
- ・子守帯に赤ちゃんの落下を防止するための調節具がある場合は、正しく調節し、固定箇所を確実に締める
- ・赤ちゃんの股関節脱臼を防ぐために、歩き出す前までは両足をそろえずに、股を開いた状態で抱っこする。オムツを交換する時に、股の開き具合に注意を払う
- ・首が据わるまでは背当て、頭当てがあるものを選ぶ
- ・なお、子守帯には（財）製品安全協会（SG）により認定された商品もあるので、購入時の参考にするとよい^{（注2）}

<情報提供先>

- ・消費者庁消費者情報課地方協力室

<参考資料>

1. CPSC (Consumer Product Safety Commission : 米国消費者製品安全委員会) のレポート (「Infant Deaths Prompt CPSC Warning About Sling Carriers for Babies」) の和訳^(注3)
「CPSC、乳幼児死亡事故を受けてスリング式運搬具に警告」(2010年3月12日)

ワシントン D.C. - 米国消費者製品安全委員会 (CPSC) は、4ヶ月齢未満の赤ちゃんにベビー スリングを使用する際は注意を払うよう両親や保護者に呼びかけています。CPSC は過去 20 年の事故報告を調査する中で、2009 年の 3 件を含め、少なくとも 14 件の死亡事故がスリング式 乳幼児運搬具に関連していることを確認し、さらに調査を進めています。死亡事故のうち 12 件で 4ヶ月齢未満の赤ちゃんが関係していました。

スリングは、赤ちゃんに 2 種類の窒息事故をもたらすおそれがあります。生まれてまだ数ヶ月の赤ちゃんは首の筋肉が弱いため、頭を思い通りに動かすことができません。スリングの布は乳幼児の鼻や口を塞ぎ、赤ちゃんの呼吸を阻害して、1,2 分であつという間に窒息させてしまうおそれがあります。さらに、スリングの中で乳幼児が丸まったままになり、顎が胸にくっついてしまうと、気道が狭められ、酸素の供給量が限られるおそれがあります。赤ちゃんは泣いて助けを求めることができず、ゆっくりと窒息するおそれがあります。

スリングの中で死亡する赤ちゃんの多くは、出生時低体重の双子だったか、未熟児で生まれたか、風邪を引くなど呼吸系に問題を抱えていたか、いずれかの状態にありました。そのため、CPSC は未熟児、双子、虚弱体質や低体重の乳児の両親は特に注意を払い、スリングの使い方についてはかかりつけの小児科医に相談するよう呼びかけています。

2ヶ月前に、強制的な規格が必要な幼児用耐久財のリストにスリングを追加しました。さらに CPSC の職員は、どういった追加対策が適切なのかを判断するため、これらの製品を積極的に調査しています。強制的な規格が開発されるまで、CPSC は ASTM インターナショナルと協力して、スリング式乳幼児運搬具に有効な自主規格を取り急ぎ作成しています。

CPSC は、両親及び保護者に、乳児の顔が覆われていないこと、そしていつでもスリングの装着者から見えていることを肝に銘じておくよう勧めています。スリングの中の赤ちゃんに授乳をする場合には、赤ちゃんが仰向けになるように、そしてスリングやお母さんの身体で顔が塞がれないように、授乳後に赤ちゃんの姿勢を変えてください。両親と保護者はスリングの中の赤ちゃんを頻繁に確認するよう気を配る必要があります。

(<http://www.cpsc.gov/cpscpub/prerel/prhtml10/10165.html>)



2. Health Canada (カナダ保健省) のレポート (「Health Canada Remains Parents to Exercise Caution When Using Infant Slings and Soft Infant Carriers」) の和訳^(注3)

「カナダ保健省、ベビースリングや軟質幼児運搬具を利用する際は注意するよう保護者に呼びかけ」(2010年3月12日)

オタワ-カナダ保健省は、両親や保護者に対して、ベビースリングや軟質幼児運搬具を使用する際は注意するよう呼びかけています。負傷する傾向があるのは以下の場合です。

- ・保護者が躓いて転んだときに赤ちゃんがスリングや軟質運搬具から転げ落ちる
- ・製品が正常に機能しないか金具が壊れている
- ・赤ちゃんが脇か脚の開口部から滑り落ちる
- ・赤ちゃんが不適切な姿勢になるか製品を不適切に使用する結果赤ちゃんが窒息する

保護者は毎回ご使用になる前に、スリングや軟質運搬具の縫い目が裂けていないか、ストラップが破れていないか、金具が破損していないかを調べるとともに、赤ちゃんを乗せる前に安全であるということに万全を期す必要もあります。保護者は、赤ちゃんがそうした製品の中にいる間、頻繁に確認することをお勧めします。新鮮な空気が十分に供給され、子供の気道が塞がれないようにするため、赤ちゃんの頭がスリングの上側に出て、常に顔が見えるようにする必要があります。

赤ちゃんの鼻や口が製品の布や保護者の身体に押し付けられると呼吸の妨げになるため、窒息してしまうおそれがあります。スリングによっては赤ちゃんが丸まってしまうデザインのものがありますが、そうすると頭が胸にくっついてしまい、子供の気道が狭まる可能性があります。保護者は、赤ちゃんを暖かくするためにスリングや軟質運搬具の中の赤ちゃんごとコートでくるんで前を閉じるべきではありません。

赤ちゃんは1分もしないうちに窒息するおそれがあります。意識が失われると、泣いて助けを求めることができなくなる可能性があります。未熟児や風邪などの何らかの症状が出ている赤ちゃんは特に窒息する危険があります。保護者は一層の注意を払い、スリングや軟質運搬具を使用する前にかかりつけの小児科医に相談する必要があります。

ベビースリングや軟質運搬具を保護者が装着して使用したことで、赤ちゃんが重傷を負ったことがあります。1995年以降でも、軟質乳児運搬具での2件の死亡事故を含め、9件の事故がカナダ保健省に報告されてきました。米国消費者製品安全委員会はこの20年でスリング式乳幼児運搬具に関する窒息死が14件発生したことを確認しています。

規格を開発する著名な世界的組織である ASTM インターナショナルは軟質乳児運搬具の自主的な規格を発表しています。カナダ保健省も ASTM インターナショナルと協力して、ベビースリングに自主的な規格を開発し、カナダの子どもたちの安全を維持する手助けをしています。

(http://www.hc-sc.gc.ca/ahc-asc/media/advisories-avis/_2010/2010_36-eng.php)

(注3) この翻訳は、当センターの責任において行ったものである。

3. 危害情報システムの収集件数

(1) 年度別件数

年度	消費生活センター	協力病院	計
1999年度	8	2	10
2000年度	2	2	4
2001年度	0	6	6
2002年度	1	2	3
2003年度	2	3	5
2004年度	1	2	3
2005年度	5	4	9
2006年度	1	2	3
2007年度	0	4	4
2008年度	6	7	13
2009年度	3	1	4
合計	29	35	64

(2) 年齢別件数

年齢	消費生活センター	協力病院	計
0歳	9	0～2ヶ月	4
		3～5ヶ月	10
		6～8ヶ月	10
		9～11ヶ月	4
1歳	1	4	5
2歳	1	2	3
3歳	0	1	1
不明	15	0	15
他	3	0	3
合計	29	35	64

4. 回収情報等

- ・ CPSC

(<http://www.cpsc.gov/cpsc/pub/prerel/prhtml10/10177.html>)

- ・ infantino (米インファンティーノ社)

(<http://service.infantino.com/SlingRider.html>)

- ・ 株式会社ルミカ

(<http://www.lumica.co.jp/?p=231>)

5. 参考写真



<title>スリングや抱っこひもなど赤ちゃん用子守帯に注意 — 窒息、転落、股関節脱臼の危険性も — </title>